

台湾日本統治下時代の1931年第17回全国中等学校 優勝野球大会（甲子園大会）で準優勝した 嘉義農林学校「KANO」に関する調査報告

松岡弘記*，塚田麻美**

1. はじめに

1) 台湾映画「KANO - 1931海の向こうの甲子園-」^{注1)}（写真1）との出会い

2014年3月、中国天津市に滞在していた際に、テレビにて台湾野球映画の「KANO」が取り上げられて監督やプロデューサーのインタビューを交えた特番が放送されていた。この「KANO」は台湾が日本統治下時代の1931年に第17回全国中等学校優勝野球大会（現在の甲子園大会）へ初出場して準優勝した実話を題材にした映画であり、台湾で2014年1月に大ヒットした。監督は馬志翔^{注2)}であり、プロデューサーは魏徳聖^{注3)}である。また、この映画の日本公開は2015年1月であった。



写真1 映画「KANO」ポスター（台湾版）

このテレビ特番を見た時に「この野球に人気がない中国でも取り上げるだけの価値があるビッグな話題なんだ」と感心したのと同時に、この映画を少しでも早く見てみたいとの感情が湧き出ながらも心の底からこの上ない悔しさがこみ上げてきた。実はこの映画制作に携わった魏徳聖プロデューサーが、6月に開催される本学（愛知大学名古屋校舎）の講演会の講演者に決まっていた。これを取り持ったのが本学で長年に渡って体育実技の非常勤教員として中国武術をご担当して頂いている張成忠老師で、その開催の決まったことを、タイミング悪く天津への4ヶ月滞在の出発前に聞いていたからであった。

筆者たちは、戦前に台湾で野球がやられていたこと、ましてや甲子園大会へ出場した中等学校のチームがあったこと、また、そのチームが初出場で準優勝に輝いたことなど全く知らず、どうやって台湾の野球が始まり、何故そのような快挙が成し遂げられ、さらに、それが今日の台湾野球にどのような影響をもたらしたのかを知りたいと、とても深い興味を抱いたのである。

2) 現在の台湾嘉義市と当時の嘉義農林学校に関する調査目的

筆者たちは、日本で2015年1月に封切りとなる「KANO」を見る前の2014年9月の夏期休暇中に台湾へ行き、嘉義市^{注4)}と国立嘉義大学^{注5)}を訪問し、自分たちの眼で日本統治下時代から残存している史跡を見学し、嘉義農林学校の当時の様子を肌で感じ取り、嘉義農林学校野球部の当時の活躍を調査したいと考えた。本調査の目的は、嘉義農林学校の当時の活躍は現

* 愛知大学現代中国学部教授

**名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士前期課程

在の国立嘉義大学棒球と台湾棒球を発展させる原動力となり得たのか、また、どのような貢献をしたかについて明らかにするための資料を得ることであった。

2. 中華民国(台湾)の嘉義市について

今回の調査には、本学現代中国学部の黄英哲教授が嘉義のご出身であったことから、黄教授のご友人である国立嘉義大学の応用史学系教授兼台湾文化研究中心主任の李明仁教授と同大

学の台湾文化研究中心助手研究員の李貴民助教授並びに秘書室専門委員の范恵珍氏をご紹介頂いた。また、彼らに多大なる御支援とご協力を頂き、嘉義市内および嘉義大学内等のご案内をして頂き、そこで体験したことを、その際にさまざまな情報を頂戴したことを以下に書き示した。

1) 嘉義市について

嘉義市は、台北から高铁(新幹線)で1時間

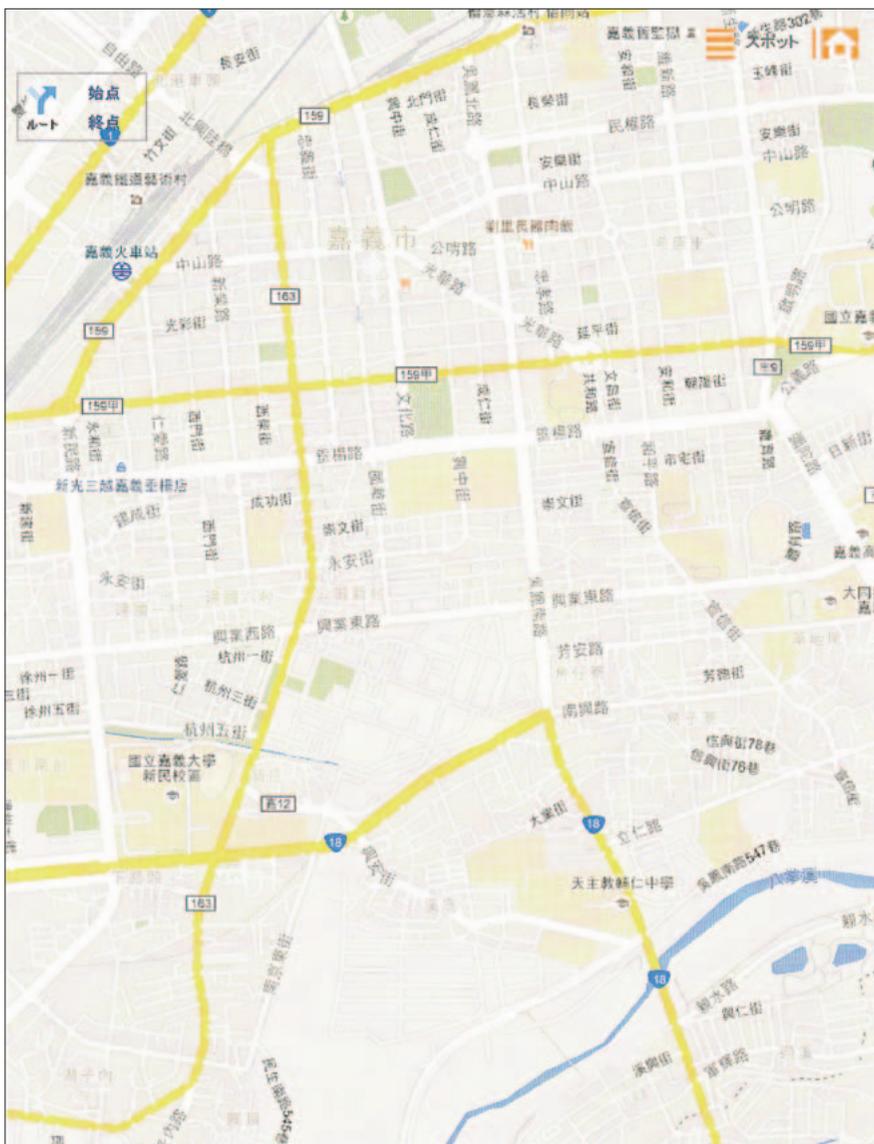


図1 現在の嘉義市内地図「台北ナビのGoogle地図」より転載



写真2 「七彩噴水」の1931年嘉義農林学校のエース 吳明捷の銅像



写真3 「嘉義公園」入り口

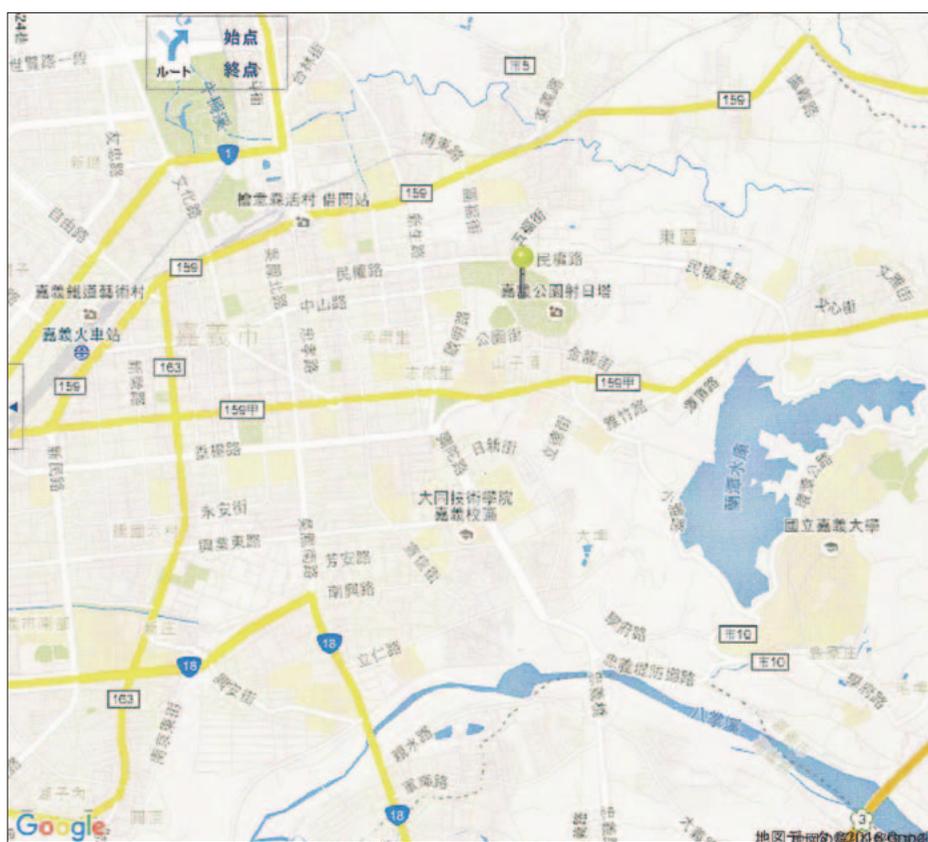


図2 現在の嘉義駅周辺地図 「台北ナビのGoogle 地図」より転載

26分、台湾西南部の華南平原北端に位置し、現在の人口は約27万人の市である。高鉄の嘉義駅は郊外にあり、そこから台鉄の嘉義駅まで車で約30分である。台鉄の嘉義駅周辺から繁華街となっており、駅前の道を東に進む一本道（中山路）がメインストリートであり、その先に公明

路との別れ道がロータリーとなっている。そこが呉明捷の銅像が中央に立つ「七彩噴水」^{注6)}（図1・写真2）であり、そこまでの中山路の両側には、さまざまな店が軒並み続く。その中山路を進むと「嘉義公園」^{注7)}（図2・写真3）に辿り着く。



写真4 「嘉義市立棒球(野球)場」



写真5 孔子廟



写真6 射日塔



図3 日本統治時代の嘉義駅周辺商店地図 「古写真が語る台湾日本統治時代の50年1895-1945」より転載



図4 嘉義榮町通り（中山路）
「日本人が残した素晴らしい台湾～統治時代の貴重な写真を発掘！」より転載



写真7 1939年の嘉義公園野球場での野球試合の様子

「嘉義公園」内には、現在は、嘉義神社の一部の社務所・斎館が当時の木造建築のまま残っており、嘉義市史跡資料館となっている。また、当時の手水舎、参道、石燈、狛犬などは現在もある。その他に嘉義市立棒球场^{注8)}（写真4）、嘉義植物園、孔子廟^{注9)}（写真5）、射日塔^{注10)}（写真6）があり、268,000平方メートルの広大な公園として、嘉義市民たちの憩いの場となっている。

2) 日本統治下時代の嘉義市

陳柔縉著の「日本統治時代の台湾」^{注11)} からその当時の統治状況の概要をみると、1895（明治28）年、日清戦争に勝利した日本は、下関講和条約で台湾・澎湖諸島が日本に割譲され、これに反対した漢人の抗日の武装闘争終結は、1915（大正4）年であった。また、山地の鎮圧は1920（大正9）年サラマオ蜂起にて平穏と



図5 日本統治下での嘉義農林学校
「日本人が残した素晴らしい台湾～統治時代の貴重な写真を発掘！」より転載

なったかにみえたが、1930（昭和5）年に霧社でタイセル（セデック）が蜂起し、日本人134人が殺される霧社事件が勃発し、2ヵ月かかってやっと鎮圧されていた。これはKANOが甲子園へ出場する前年のことであり、日本の統治が始まって35年経過しても平穏とは言い難い時代であったといえよう。

日本統治下における当時の嘉義市内の鉄道駅周辺の地図^{注12)}（図3・図4）をみるとこのメインストリート（中山路）を挟んで日本人の商店街が道の両端に立ち並んでいることがわかる。

「嘉義公園」が1910（明治43）年に設立され、その公園内には、嘉義神社（1915（大正4）年創建）と運動場や動物園、児童遊園地があり、日本人の参拝と憩いの場であった。

また、この公園内に嘉義市立棒球场が1918（大正7）年に創建され、当時、KANOの練習場や試合会場^{注13)}（写真7）としても使われており、その後、1998（平成10）年に改装されて現在の1万人収容の球場となっていた。

4. 嘉義農林学校と国立嘉義大学

嘉義農林学校の設立については、春山氏が映画「KANO」の劇場用パンフレット^{注14)}に書かれたことを参考に以下にまとめた。

台湾公立嘉義農林学校^{注15)}（図5・写真8・



図6 国立嘉義大学キャンパス地図 「国立嘉義大学ホームページ」より転載



写真8 国立嘉義高級商業職業学校
(嘉義農林学校跡地)



写真9 国立嘉義大学新民キャンパス内の学生寮
(嘉義農林学校野球部練習場跡地)



写真10 蘭潭水庫(国立嘉義大学蘭潭キャンパス近辺)



写真11 国立嘉義大学蘭潭キャンパス(本部)



写真12 国立嘉義大学新民キャンパス野球部練習球場
(打撃練習風景)

写真9)は、1919(大正8)年に第七代明石元二郎総督の「同化主義」政策^{注16)}に基づいて台湾教育令が制定されて台湾人の中等教育の拡充のために創立された農業科と林業科の二学科からなる実業学校である。公学校6年を終了した台湾人に受験資格があり、修業年限は3年であった。その後、地方制度改正の影響によって1921(大正10)年に台南州立嘉義農林学校と改称される。

1922(大正11)年新たに台湾教育令が制定され、内地人(日本人)と台湾人(漢人、原住民)

の3民族の共学を可能とする「内台共学」制度^{注17)}が導入され、1926(大正15)年には、修業年限が5年に延長された。

さらに、1945(昭和20)年には台湾省立嘉義農業職業学校、1965(昭和40)年に台湾省立嘉義農業専科学校、1981(昭和56)年に国立嘉義農業専科学校、1997(平成9)年に国立嘉義技術学院と変遷し、そして、2000(平成12)年2月に元国立嘉義技術学院と元国立嘉義師範学院が統合されて現在の国立嘉義大学^{注18)}と(図6・写真10・写真11)なった。



写真13 国立嘉義大学野球部の鐘宇政監督(左から二人目)、李明仁教授(右端)、李貴民助教授(左端)と筆者(右から二人目)、野球部練習球場ダグアウトに於いて撮影



写真15 第17回全国中等学校優勝野球大会準優勝記念モニュメント(蘭潭キャンパス行政センター前の中庭)



写真14 国立嘉義大学野球部の選手達と記念撮影(新民キャンパス野球部練習球場に於いて)



写真16 「天下の嘉農」記念モニュメント(蘭潭キャンパス行政センター前の中庭)

国立嘉義大学は、本部が嘉義市東区学府路300番の蘭潭キャンパスにあり、その他にキャンパスが新民キャンパス、民雄キャンパス、林森キャンパスに分かれている。現在の大学の野球部は新民キャンパスに野球場^{注19)}(写真12・写真13・写真14)があり、そこで練習していた。

嘉義農林学校(以下嘉義農林と示す)野球部の創設は、1928(昭和3)年で、濱田次箕が初代部長となり、監督は安藤信哉であったが、その年末に嘉義商工補習(専修)学校の簿記教諭をしていた近藤兵太郎^{注20)}にコーチ要請をし、近藤が指導することになり、1931(昭和6)年正式に監督となった。

近藤兵太郎は、1903(明治36)年愛媛県立商業学校(1906(明治39)年より松山商業学校、現在の松山商業高等学校)に入学し、野球部で第一高等学校野球部の杉浦忠雄から一高式の「武士道野球」^{注21)}の指導を受けた。卒業してから母校野球部のコーチとなり、その後、初

代監督として、1919(大正8)年から6年連続で全国中等学校野球大会へ出場し、1925(大正14)年春の第2回選抜中等学校野球大会で優勝に導いた名将である。嘉義農林はこの監督のスパルタ指導がなされ、日本人、台湾人(漢人)、台湾原住民の混成チームは実力第一に平等主義の下に鍛え上げられ、1931(昭和6)年の第9回全島中等学校野球大会で初優勝し、初出場の第17回全国中等学校優勝野球大会で準優勝の快挙を成し遂げた。

5. 国立嘉義大学内の甲子園準優勝記念モニュメントと嘉義農林棒球展示室

1) 甲子園大会準優勝記念モニュメント

国立嘉義大学の蘭潭キャンパス内には、第17回全国中等学校野球大会の準優勝を記念して建てられたモニュメント^{注22)}(写真15)があった。また、大きな白球に「天下の嘉農」と金文字で記されたモニュメント^{注23)}(写真16)があっ



写真17 「永遠の中堅手—蘇正生（1921-2008）」の銅像（蘭潭キャンパス行政センター前の中庭）



写真20 第17回全国中等学校優勝野球大会準優勝記念盾



写真18 嘉義農林学校時代の野球チームの写真



写真21 各野球大会獲得トロフィー



写真19 台湾野球史記念集



写真22 嘉義大学野球チームのサイン入りユニフォーム

た。さらに、芝生の中に「永遠の中堅手—蘇正生（1921（大正10）-2008（平成20）年）」の銅像^{注24}（写真17）があった。

2）国立嘉義大学校史室（中正ホールと文書館）

国立嘉義大学蘭潭キャンパスには、創立以来の貴重な資料が集められて保存されている校史

室が行政センター2階の中正ホールと文書館にある。中正ホールには嘉義農林時代の野球チームの写真^{注25}（写真18）、台湾野球史記念集^{注26}（写真19）、準優勝記念盾の復刻^{注27}（写真20）、中華嘉農校友会会旗等が展示されていた。

国立嘉義大学の前身である嘉義農林のKANO野球チームが1931（昭和6）年から



写真23 1931年嘉義野球選手
(吳明捷、藍德和、陳耕元)



写真25 1931年嘉義野球選手
(福島又男、蘇正生、羅保農)



写真24 1931年嘉義野球選手
(拓弘山、吳明捷、劉蒼麟)



写真26 1931年全島中等学校野球大会決勝戦
(嘉義農林対台北商業)

1936(昭和11)年に渡って日本での全国中等学校野球大会(現在の甲子園大会)へ5回出場し、1931(昭和6)年に準優勝を獲得した当時の様子を見ることができた。

一方、文書館には、「本学の榮譽」、「嘉義農林時代における甲子園野球チーム写真」、「嘉義農林時代における野球チームの写真」、「嘉義農林時代における学生の実習写真・キャンパス写真」等のコーナーがあった。

「本学の榮譽」コーナーには、1931(昭和6)年KANO甲子園準優勝記念盾、各大会で獲得したトロフィー^{注28)}(写真21)、KANO必勝旗、嘉義大学野球チームのサイン入りユニフォーム^{注29)}(写真22)等が展示されていた。

「嘉義農林時代における甲子園野球チーム写真」コーナーでは、1931(昭和6)年嘉義農林時代におけるKANOチーム^{注30)}(写真23・写真

24・写真25)の近藤兵太郎監督、吳明捷投手、藍德和(東和一)捕手、古里初雄一塁手、川原信男二塁手、拓弘山(真山卯一)三塁手、陳耕元(上松耕一)遊撃手、羅保農(平野保郎)左翼手、蘇正生中堅手、福島又男右翼手等の写真と各年代のKANOチームの写真が展示されていた。

「嘉義農林時代における野球チームの写真」コーナーには、嘉義農林野球チームが1931(昭和6)年に全島中等学校野球大会の決勝戦で台北商業学校を11対10で破り、台湾島の代表権を獲得^{注31)}(写真26・写真27)し、日本の全国中等学校野球大会(甲子園大会)へ出場^{注32)}(写真28・写真29・写真30)した時の写真が展示されていた。

「嘉義農林時代における学生の実習写真・キャンパス写真」コーナーでは、1939(昭和14)年



写真27 1931年全国中等学校野球大会決勝戦延長10回、11対10で嘉義農林優勝（台北圓山球場に於いて）



写真30 1931年全国中等学校優勝野球大会で準優勝した嘉義チーム（大和丸で台湾へ戻る）



写真28 1931年第17回全国中等学校優勝野球大会へ出発する嘉義農林選手（基隆港から高千穂丸で日本へ向かう）



写真31 1938年農業実習の様子（サトウキビ栽培）



写真29 1931年第17回全国中等学校優勝野球大会開会式入場行進（甲子園球場に於いて）



写真32 1936年農業実習の様子（水稻收穫）

から1956（昭和31）年における学生の農業実習中の写真が展示されており、サトウキビ栽培^{注33)}（写真31）、生物実験、家畜の毛刈り、水稲田植え、土木、水稲收穫^{注34)}（写真32）、農業機械、食品加工、稲殻調理等があった。また、

その他に学生生活^{注35)}（写真33）等（各部の部活動や食事等）の様子が分かる写真が多く展示されていた。



写真33 1938年学生宿舎(学生寮)での昼食の様子



写真36 アサヒ・スポーツ「第17回全国中等学校優勝野球大会」特別号の記事



写真34 1931年第17回全国中等学校優勝野球大会決勝戦(対中京商業戦)



写真37 嘉義農林チーム集合写真、近藤兵太郎監督の写真と「球は盡なり」と書かれたモニュメントボール、呉明捷投手の銅像、1933年台湾全島大会優勝記念サインボール



写真35 1931年第17回全国中等学校優勝野球大会決勝戦(対中京商業戦)のスコア



写真38 映画「KANO」の出演俳優と関係者のサインボールと撮影に使用された帽子とユニフォーム

6. 日本の野球殿堂博物館にて展示された「KANO」

映画「KANO」の2015(平成27)年1月の日本公開を記念して、東京ドームにある公益財団法人「野球殿堂博物館」にて「KANO」の

特別展示^{注36)}(写真34・写真35・写真36・写真37・写真38)が同月に行われた。そこでは、映画「KANO」のポスター、甲子園大会試合中の写真、決勝戦の対中京商業とのスコアブック、アサヒ・スポーツの「第十七回全国中等学校優

勝野球大会特別号」の記事、嘉義農林チーム集合写真、近藤兵太郎監督の写真と「球は霊なり」と書かれたモニュメントボール、呉明捷投手の銅像、1933（昭和8）年台湾全島大会優勝記念サインボール、映画「KANO」の出演俳優と関係者のサインボールと撮影に使用された帽子とユニフォームなどが展示されていた。

7. 嘉義農林野球部の活躍がその後の国立嘉義大学棒球と台湾棒球への貢献について

1931（昭和6）年嘉義農林は全島大会に初優勝し、甲子園大会へ初出場で準優勝の快挙を成し遂げたことから「天下の嘉農」の賛辞を受けた。その後、1936（昭和11）年まで嘉義農林（以下嘉農と示す）の甲子園大会出場は5回となった。この甲子園大会での嘉農の実績は、当時の台湾野球史上最高の成果であった。

2000（平成12）年に国立嘉義大学となり、1946年からの50年間に渡って作成不可能であった1931（昭和6）年の甲子園大会準優勝の記念モニュメントと、嘉農の活躍に大賛辞をもらった「天下の嘉農」銘入りのボールモニュメントが、翌年の2001年に大学本部の中庭に建てられたこと。また、嘉義大学の校史室に嘉農の当時の栄光の数々を展示したことは、国立嘉義大学の前身である嘉農の業績を讃えると同時に当時そこで培われた精神や伝統としての「嘉農精神」を国立嘉義大学が継承したといえよう。このように国立嘉義大学として「嘉農精神」を継承し、将来の大学教育の発展を目指す象徴が表出されたといえる。さらに、その「嘉農精神」は嘉義大学棒球への発展のための大きな原動力として働くと考えられる。

一方、国立嘉義大学となってからも嘉農時代に大活躍した蘇正生が国立嘉義大学棒球部の選手たちに技術指導や「嘉農精神」の直接伝承をしており、それは彼がこの世を去る2008年まで続いており、その精神の継承は伝統化したものと考えられよう。

台湾は1895（明治28）年から1945（昭和20）年までの50年間日本統治下にあった。アメリカからベースボールが日本へ伝来したのは、1872



写真39 現在の台北市立建国高級中学

（明治5）年^{注37)}である。台湾野球の始まりと発展については、湯川氏の「台湾野球史」^{注38)}を参考にすると、台湾の野球は、1904（明治37）年頃に日本から持ち込まれ、当時の台湾総督府国語学校中学部（のちの台北一中、現在の台北市立建国高級中学（写真39）に野球チームが結成されたのを台湾野球の始まりとしている。1906（明治39）年に国語学校中学部と国語学校師範部（現在の国立台北教育大学）が初めて試合をし、その後、各地の中学部に野球部が作られて野球が広まり、1913（大正2）年には各地に一般企業の野球チームも出現し、1915（大正4）年に各地に野球協会が設立された。また、1917（大正6）年と1918（大正7）年には日本から早稲田大学と法政大学が遠征に来て、各地にて台湾チームと試合をしたことから野球熱はさらに高まった。さらに、1920（大正9）年に台湾体育協会が設立されて台湾野球の発展に主導的な働きをし、日本の「全国都市野球対抗戦」や「全国中等学校優勝野球大会」へ台湾代表チームを送るようになった。また、少年を対象に「全島少年野球大会」も開催した。このように台湾の野球は、日本統治下時代の早期に日本人だけによる成人の野球と学校での野球の両路線が主軸となって同時に発展していった。

日本の「全国中等学校優勝野球大会」の始まりと外地からの出場については、川西氏の「戦前外地の高校野球」^{注39)}を参考にすると、日本で「全国中等学校優勝野球大会」は1915（大正4）年に大阪の豊中球場で始まり、1924年（大正

13)年から甲子園球場に舞台を移した。出場校は内地にとどまらず、1921(大正10)年からは日本統治下の満州と朝鮮から、1923(大正12)年からは台湾からも代表校が出場した。甲子園へ行く台湾代表校になるためには、「全島中等学校野球大会」で優勝しなければならず、1930(昭和5)年までは台北一中(3回)、台北商業(3回)、台北工業(2回)の台北3校が8年連続優勝して甲子園へ出場していた。この3校の選手は全員日本人であった。また、三民族からなる嘉農が出場するまでの甲子園での最高成績は、1929(昭和4)年の台北一中が準決勝戦への進出であった。

1922(大正11)年に台湾では内地人(日本人)と台湾人(漢人、原住民)の3民族の共学を可能とする「内台共学」制度が導入されて同じ教室で机を並べて授業を受けることができるようになった。初めてこの三民族によって嘉農が甲子園で快進撃を続け、準優勝に輝いた。それまでは日本人だけの台北一中が甲子園大会の準決勝へ進出しようが、台湾人(漢人、原住民)にとって野球は、日本人だけがやっているスポーツであり、何の興味もなかったのであろう。

西脇氏の「台湾中等学校野球史」に書かれている蘇正生氏の選手回顧録^{注40)}によると、甲子園球場の開会式の入場行進の際に凄まじい観衆のどよめきを聞いたという。「後で分かったのですが、観衆は私達が大きな体の上に色が黒く、台湾から来たという事で、珍しがられ、その上チームの中には日本人・台湾人・高砂族の3民族から成っている、新鮮味があり、特に高砂族には異様な感じで見られ、熱烈な拍手喝采を送ってくれたのでした。」と述べており、日本人以外の台湾人(漢人、原住民)が甲子園で活躍する初めてのできごとであり、日本の観衆も驚いた様子が分かる。

この三民族で甲子園大会へ出場して準優勝を成し遂げた嘉農の快挙は、嘉義市だけではなく、台湾全土の台湾人(漢人、原住民)への野球に対する情熱を大きく変化させ、台湾人の少年達に大きな夢を持たせ、台湾の野球を広く拡大普及発展させることになった。その後、多民族融

合によるチーム構成にて1936(昭和11)年まで嘉農の甲子園大会出場は5回となり、近藤監督が武士道精神野球によるスパルタ練習で教えた「礼儀の重視」と「チームの団結心による絶対に諦めない」嘉農精神^{注41)}が培われた。この嘉農精神は嘉農の伝統として後世に語り告げられていった。

嘉農が1931(昭和6)年に甲子園で準優勝した翌年の1932(昭和7)年には、中国にて日本が満州国を建国、1937(昭和12)年日中戦争が勃発し、1939(昭和14)年第二次世界大戦勃発、1941(昭和16)年日本が米国へ真珠湾攻撃、1945(昭和20)年敗戦となり、日本が降伏した。この敗戦により日本人が外地の台湾、満州、朝鮮から引き上げとなった。1941(昭和16)年から敗戦までの間、甲子園大会も中止となった。1946(昭和21)年に甲子園大会が復活するが、外地からの参加はなくなった。

しかし、戦後すぐに台湾野球は復活している。1946(昭和21)年に台湾省体育協会主催の「第1回台湾省運動会」^{注42)}(写真40)が開催され、その中の種目に野球があり、台湾人だけで実施された。王御風と蔡博任^{注43)}によると1949(昭和24)年に台湾省棒球委員会が成立し、その後、1957(昭和32)年に全国棒球委員会へ改組された。これらの棒球委員会の成立によって台湾人のための台湾野球が一層拡大発展していった。

中国国民党が1949(昭和24)年から1987(昭和62)年まで戒厳令を執行し、白色テロと呼ば



写真40 1946(昭和21)年第1回台湾省運動会に出場した嘉義野球チーム

れる恐怖政治によって、多くの台湾人が投獄、処刑されてきた。また、内外の批判によって国民党政府が漸く戒厳令を解除した後も、国家安全法によって言論の自由が制限されていた。台湾の「民主化」が実現するのは、李登輝総統が1992（平成4）年に刑法を改正し、言論の自由が認められてからのことである。したがって、その間、日本植民地下の歴史と文化を対象とする研究が制限され、嘉農の物語は戦後の台湾では何十年間も語られることさえもなかった。^{注44)}

その後の台湾野球の歴史を王御風と蔡博任^{注45)}の「図解台湾棒球史」から概略をまとめると、1968（昭和43）年台湾原住民のブスン族からなる台東の山奥の少年野球チーム「紅葉チーム」が台湾遠征にきた日本リトルリーグ関西選抜チームを破った。このできごとは、戦後いつも日本に負けていた野球力学を一変させる画期的なことであり、翌年の世界チャンピオンへの布石となった。また、台湾では少年野球ブームが爆発的に一気に起こった。

翌年の1969（昭和44）年金龍少年チームがリトルリーグ・ワールドシリーズ大会で優勝した。この優勝は、ナショナルアイデンティティ（国民意識）を高揚し、重なる外交危機に見舞われた1970（昭和45）年代の台湾にとって力強い精神的支柱となり、この後40年間台湾野球史は、「紅葉チーム」と「金龍少年チーム」が伝承されていくのみであった。

その後、1984（昭和59）年のロサンゼルスオリンピックで初めて台湾ナショナルチームが銅メダルを獲得し、1990（平成2）年には台湾プロ野球（CPBL）「中華職業棒球」が4チームで開幕した。また、1992（平成4）年にはバルセロナオリンピックで銀メダルを獲得した。

このように1992（平成4）年の民主化まで自由がなく抑圧され虐げられた時代にも台湾野球だけは、衰退することなく台湾人のナショナルアイデンティティ（国民意識）を高揚しながら、その野球に国民の欲求のはけ口を求めながら発展し、育て上げられてきたものと考えられる。1992（平成4）年までは日本統治下時代の

嘉農が台湾野球人の心の中から完全に忘却されたものごとく一切表出することはなかった。

しかし、台湾野球人の心の片隅に嘉農精神が生きていることが確証できるできごとが起こった。民主化後の台湾野球に日本人が賞賛を送ったできごとである。2013（平成25）年WBC（ワールド・ベースボール・クラシック）^{注46)}において、台湾が東京ドームで日本と対戦して延長10回4対3と負けはしたものの善戦し、日本とシーソーゲームをやれるだけの世界トップクラスの水準まで駆け上がっていた。その試合終了直後マウンドに台湾選手が全員集まり丸くなり、観客へ向いて四方に一礼したのである。この一礼は、日本統治下の時代に日本人から教えてもらった台湾での野球に対する感謝の気持ちを表現したのであった。この礼儀正しい姿勢は、台湾野球精神の原点としての嘉農精神が今日も台湾野球にて引き継がれていることの象徴であるといえよう。

嘉農野球が再度台湾で脚光を浴びるのは、2005（平成17）年に蔡武璋氏が10年間に渡り企画した作品「コレクション嘉農野球」^{注47)}の（写真41）出版である。映画「KANO」のプロデューサーである魏徳聖が本屋で偶然に見つけた本で1931（昭和6）年の嘉義農林が甲子園大会へ出場したことを知り、脚本着手したのが2006（平成18）年であった。その後、2010（平成22）年に脚本が完成し、2012（平成24）年から映画「KANO」の制作が開始された。2014（平



写真41 2005（平成17）年出版された「コレクション嘉農棒球」（蔡武璋企画制作）

成26)年に台湾での劇場公開となり、嘉農野球は台湾人の心の中に忘れられていた台湾野球の原点としての野球聖地嘉義の嘉農精神を完全に復活させて蘇らせることとなった。

この2013年WBCのできごとと「KANO」の出現は、将来も嘉農精神が台湾野球の原点として後世に語り継がれていき、台湾野球を一層発展させる大きな原動力となることが考えられた。

8. まとめ

台湾の嘉義市と国立嘉義大学を訪問し、自分の眼で日本統治下時代から残存している史跡を見学し、現存する多くの写真や資料によって嘉義農林学校の当時の様子や野球部の活躍を知ることができた。1931(昭和6)年の甲子園大会準優勝とその後5回の甲子園大会への出場は、嘉義市だけではなく、台湾全土の台湾人(漢人、原住民)への野球に対する情熱を大きく変化させ、台湾人の少年達に大きな夢を持たせ、台湾の野球を広く普及発展させる原動力となった。また、近藤兵太郎監督の指導によって多民族融合でチームを平等に構成し、武士道精神野球によるスパルタ練習から「礼儀の重視」と「チームの団結心による絶対に諦めない」ことが教えられ、そこに嘉農精神が培われた。この嘉農精神は嘉義農林の伝統として国立嘉義大学野球部にも受け継がれていた。

一方、戦後の1946(昭和21)年から1987(昭和62)年まで続いた国民党の戒厳令と白色テロの恐怖政治により、日本統治下時代に築き上げられた嘉農野球は、その間に浮かび上がることができず、台湾の人々の心の中から忘れられていた。しかし、1992(平成4)年の台湾の「民主化」が実現してから、2013(平成25)年のWBCで台湾選手たちが行ったマウンドでの一礼は、日本統治下時代に台湾人へ教えた日本野球に対する感謝の気持ちであり、台湾野球人の心の片隅に嘉農精神が生き続けていることを証明した。さらに、2005(平成17)年に蔡氏による「コレクション嘉農野球」の出版と2014(平成26)年の映画「KANO」の上映により、台

湾人の心の中に忘れられていた台湾野球の原点としての野球聖地嘉義の嘉農精神を完全に復活させて蘇らせることができた。この二つのできごとにより、将来も、嘉農精神が台湾野球の原点として後世に語り継がれていき、台湾野球を一層発展させる大きな原動力となることが考えられた。

謝辞

本調査遂行に当たり、本学現代中国学部の黄英哲教授と国立嘉義大学の応用史学系教授兼台湾文化研究中心主任の李明仁教授、同大学の台湾文化研究中心助手研究員の李貴民助教授、同大学野球部の鐘宇政監督並びに秘書室専門委員の范恵珍氏にお忙しい中を私たちのために多大なる御支援とご協力を頂きましたことに心より深謝申し上げます。

注

注1) 2014(平成26)年2月に台湾で公開となった台湾映画であり、日本統治下の1931(昭和6)年台湾にある嘉義農林学校が全島中等学校野球大会を初制覇し、日本での第17回全国中等学校優勝野球大会(現在の夏の甲子園大会)へ初出場で準優勝に輝いた実話が題材である。この映画では、日本人と台湾人(漢人、原住民)の三民族を平等な実力主義の下に近藤兵太郎監督(主演:永瀬正敏)が武士道精神野球指導によるスパルタ式練習によって選手を鍛え上げ、甲子園大会で準優勝の快挙に導く姿と、同時に台湾南部の大規模灌漑事業を10年かけて成し遂げ、台南平野を一大穀倉地帯に変えた「嘉南大圳の父」と呼ばれる八田與一(特別出演:大沢たかお)の活躍も描かれている(アイ・プランニング, 2015, pp.10-11)。

注2) 2000(平成12)年に台湾テレビドラマで俳優デビューし、台湾映画に出演後、魏徳聖監督作の「セデック・バレ」では台湾原住民の頭目役を演じた。「KANO~1931海の向こうの甲子園~」は初の劇場用映画監督作となる(アイ・プランニング, 2015, p.15)。

注3) 2008(平成20)年長編監督デビュー作「海角七号 君想う、国境の南」が空前の大ヒットとなり、第45回金馬奨で助演男優賞、音楽賞、主題歌賞、観客賞、年度台湾傑出映画賞、年度台湾傑出映画人賞に輝き、台湾映画興隆の火付け役となる。

- 2011（平成23）年には、日本統治下の台湾原住民の抗日暴動「霧社事件」を描いた超大作「セデック・バレ」を監督、第48回金馬獎で作品賞、助演男優賞、音楽賞、音響効果賞、観客賞を獲得した（アイ・ブランニング, 2015, p.15）。
- 注4）嘉義市は省割市であり、木材、製糖業などが盛んな産業都市である。もともと平埔族系原住民が住んでいた土地であり、「山が連なる」という意味の諸羅山と呼ばれていたが、1787（天明7）～1788（天明8）年に起きた林爽文の乱の際に、諸羅山の民が反乱者たちから町を守り抜いた。その乱の平定後、乾隆亭が地名を「民の忠義（義）を賞賛（嘉）する」という嘉義に改称した（地球の歩き方編集室, 2014, p.219）。
- 注5）国立嘉義大学は、師範学院、人文芸術学部、管理学部、農学部、理工学部、生命科学部からなり、嘉義市内に4つのキャンパスに分かれている（国立嘉義大学 HP, <http://www.ncyu.edu.tw/NewSite/>）。
- 注6）呉明捷は、1931（昭和6）年嘉義農林学校野球チームの主将兼エースで4番打者として、チームを引っ張り、全島大会では台中一中を継投でノーヒットノーランに封じた。第17回全国中等学校優勝野球大会では、初戦の神奈川商工に完封勝利し、全試合完投して準優勝投手に輝いた（魏徳聖, 2014, pp. 427-428）。
- 注7）嘉義公園は1910（明治43）年8月開園。当初、敷地内には運動場や動物園、児童遊園地があった。1915（大正4年）年10月に嘉義公園を神苑として嘉義神社が創建された（片倉佳史, 2015, p162-165）。
- 注8）嘉義市立棒球场は収容人員1万人、天然芝、内野赤土、両翼107m、中堅122mであり、台湾プロ野球の試合も開催されている（ストライク・ゾーン, 2015, p71）。
- 注9）孔子廟は1753（宝暦3）年に建立、その後、1912（大正元）年に現在の場所に改築された（TAIPEInavi HP, <http://www.taipeinavi.com/miru/212/>）。
- 注10）高さ62メートル、阿里山の神木をイメージしたデザインで、褐色のアルミ模様は、神木の外皮を模した。中央には高さ40メートルの「一線天」、内部には、原住民の「射日神話」を題材にした青銅の彫刻を配置。この神話は、人類が引き継ぐ伝承の精神を表し、人々の心を奮い起こす教育的な意義を持っている（TAIPEInavi HP, <http://www.taipeinavi.com/miru/212/>）。
- 注11）陳柔縉（2014, pp. 6-8）。
- 注12）片倉佳史（2015, p.164）。
- 注13）1939（昭和14）年の嘉義公園野球場は、ホームベースの後方にスタンドがあるが、両サイドにはスタンドがなかった。第7回全台湾中等学校野球選抜大会がここで開催され、嘉義農林学校が優勝した。
- 注14）春山明哲（アイ・ブランニング2015, pp. 20-22）。
- 注15）1919（大正8）年創立当時の嘉義農林学校（図5）は、現在の国立嘉義高級商業職業学校（写真8）の場所に建てられた。1928（昭和3）年に発足した嘉義農林学校野球部は、現在の新民キャンパスの学生寮（写真9）の場所で練習をしていた。
- 注16）陳培豊（2001, pp. 23-26）台湾における日本の植民地統治は、「同化」＝文化上の強制、拒絶、弾圧抑制、抵抗、崩壊とは別の経路で、近代文明をめぐる付与と受容、希求と拒絶、自立と抑止の駆け引きの歴史の側面を持つ。この同化政策の実施は、度量衡、経済、法律面の統一を図り、通婚、和服の着用、改姓名運動など多岐に渡る生活様式の同一化も「同化」の一環といえる。しかし、その政策としての一貫性を最も持っていたのは国語教育であると捉えている。
- 注17）喜安幸夫（1997, pp. 119-121）初等教育を除き、すべての学校を同一系統に統合し、日本人も台湾人も同一の試験によって選抜され、合格者は机を並べて同じ教育を受ける。
- 注18）国立嘉義大学は、嘉義市内の4つのキャンパスに分かれている（国立嘉義大学 HP, <http://www.ncyu.edu.tw/NewSite/>）。嘉義市民の生活用水を貯めている蘭潭水庫（写真10）のすぐ近くに大学本部が所在する蘭潭キャンパス（写真11）がある。
- 注19）新民キャンパスの野球練習場は嘉義大学野球部専用グラウンドである。嘉義大学野球部監督の鐘宇政監督（写真13）は、台湾ナショナルチームの投手で1992（平成4）年のバルセロナオリンピック銀メダリストである。
- 注20）古川勝三（2015, pp. 6-230）。
- 注21）飛田穂洲（1974, pp. 18-32）は、日本の学生野球は修練の野球であり、苦痛の野球でもあり、虐待の練習ともなり、涙と血の連続によってようやく選手の地位が保たれ、その先駆となったのは一高野球だという。玉木正之、ロバート・ホワイティング（1991, pp. 3-8）は、アメリカ人が紹介したベースボールが日本の黎明期の指導者たちが日本の武術の教義を持ち込み、際限のない鍛錬による精神の錬磨を野球における最も重要な要素と考

えて忠実に実行した。それが一高野球部であったという。坂上康博(2001, pp. 15-20)は、アメリカの国民的娯楽である野球が、武道精神や武士道という日本の伝統的文化と出会い、精神修養の道具(難行苦行の自己鍛錬、忠誠心や協調の精神などを培う)へと変容していく過程にほかならず、その典型が一高野球部であるという。

注22) このモニュメントは、国立嘉義大学となった翌年の2001(平成13)年に前身である嘉義農林学校が第17回全国中等学校優勝野球大会で準優勝したことへの栄誉を讃えて建設された。

注23) 第17回全国中等学校優勝野球大会に台湾代表として初出場し、準優勝した快挙に対して「天下の嘉農」との賛辞を頂いたことを記念して作られた。

注24) 蘇正生は、元テニス部に所属していたが、3年時に強肩と俊足を近藤監督に見込まれ、野球部に転部し、5年時に2番中堅手で第17回全国中等学校優勝野球大会へ出場し、大活躍した。特に2回戦の札幌商業戦で中堅左フライナー性のフェンス直撃(420フィート:約128m)の大三塁打を打ち、球場と全国を震撼させたことを記念して作られた。

注25) 1931(昭和6)年に第17回全国中等学校優勝野球大会へ出場したときの個人や集合写真、新聞記事などがあった。

注26) 台湾野球に関する記念誌が展示されていた。特に嘉義農林の第17回全国中等学校優勝野球大会準優勝が記載されていた。

注27) 嘉義農林が持ち帰った第17回全国中等学校優勝野球大会準優勝盾は、戦後の混乱で紛失してしまった。しかし、日台の関係者の尽力で1996(平成8)年に復刻がなされ、大阪の日本高校野球連盟本部へ84歳の蘇正生が行き、受け取り涙を流して喜んだ。2年後の第80回記念大会に甲子園へ招かれた蘇らは、この盾を抱いて松山市を訪れ、近藤兵太郎の墓前に報告した。

注28) 各大会で獲得した各種トロフィーがいくつも並んでいた。

注29) 嘉義大学のユニフォームには鐘宇政監督のサインもあった。

注30) 写真23は1931(昭和6)年に活躍した呉明捷投手(漢人)、藍徳和捕手(原住民アミ族)、陳耕元遊撃手(原住民プユマ族)、写真24は、拓弘山三塁手(原住民アミ族)、呉明捷投手(客家人)、劉蒼麟控え投手(漢人)、写真25は、福島又男右翼手(日本人)、蘇正生中堅手(漢人)、羅保農左翼手(原住民アミ族)の三民族。

注31) 写真26と写真27は、台北圓山球場で行われた

1931(昭和6)年全島中等学校野球大会の決勝戦(嘉義農林対台北商業)の各々一場面。多くの観客が見ていることがわかる。

注32) 写真28は、高千穂丸甲板上での記念撮影、基隆港から高千穂丸で神戸へ3泊4日の遠い道のりだった。

注33) 嘉南平原ではサトウキビ栽培や水稲が盛んであり、嘉義農林ではその実習が行われていた。午前中は授業の講義があり、午後が実習で15時に終わり、その後に日没まで野球の練習がやられたという。

注34) 不毛の広大な嘉南平原へ濁水溪と鳥山頭ダムからの水を遠大な灌漑工事を施して取水して嘉南平原を「台湾最大の穀倉地帯」にするという世紀の大工事「嘉南大圳」が1920(大正9)年~1930(昭和5)年の10年の歳月をかけて土木技師の八田與一によって成し遂げられた(古川勝三, 2009, pp. 10-347)。この成果によって嘉南平原は台湾最大の穀倉地帯となり、嘉義農林学校でも稲作実習(写真32)がなされていた(映画 KANO の中では1931(昭和6)年に嘉義農林の全島大会優勝と同年に同じくして嘉南大圳の完成が描かれており、史実とは異なる)(アイ・ブランニング, 2015, p.23)。

注35) 嘉義農林学校は、全寮生活であり、学生宿舎(学生寮)で生活をしていた。

注36) 写真34は、甲子園球場にて行われた1931(昭和6)年第17回全国中等学校優勝野球大会(決勝戦:対中京商業戦)の様子であり、外野スタンドも満員状態であったことがわかる。写真35は当日のスコア、写真36のアサヒ・スポーツ特別号の記事からは、「一躍大会の顔となった嘉農」が書かれている。

注37) 島田明(2001, p. 9)は、1872(明治5)年に第一大学区第一番中学(翌年、開成学校と改名)のアメリカ人教師のホーレス・ウィルソンが生徒にベースボールを伝えたという。

注38) 湯川允雄(1932, pp. 1-2)。

注39) 川西玲子(2014, pp. 13-60)。

注40) 西脇良朋(1996, pp. 144-148)。

注41) 魏徳聖(2014, pp. 406-407)、嘉義市政府(2014, pp. 3-45)。

注42) 王御風、蔡博任(2014, pp. 32-34) 写真40は、第1回台湾省運動会の記念写真(嘉義チーム)。

注43) 王御風、蔡博任(2014, p. 35)。

注44) 魏徳聖(2014, pp. 452)。

注45) 王御風、蔡博任(2014, pp. 46-106)。

注46) 王御風、蔡博任(2014, pp. 184-187)。

注47) 嘉農全国校友会理事長の蔡武璋が企画作成して出版した本(写真41)。

文 献

- アイ・プランニング (2015) KANO - カノ - 1931海の向こうの甲子園 (劇場用パンフレット). 東急レクレーション: 東京, pp. 10-11, p. 15, pp. 20-22.
- 地球の歩き方編集室 (2014) 地球の歩き方2014~2015台湾. ダイヤモンド社: 東京, pp. 219-221
- 陳培豊 (2001) 「同化」の同床異夢 日本統治下台湾の国語教育史再考. 三元社: 東京, pp. 23-26.
- 陳柔縉, 天野健太郎訳 (2014) 日本統治時代の台湾写真とエピソードで綴る1895~1945. PHP 研究所: 東京, pp. 6-8.
- 古川勝三 (2009) 台湾を愛した日本人 I - 土木技師八田與一の生涯 -. 創風社出版: 松山, pp. 10-347.
- 古川勝三 (2015) 台湾を愛した日本人 II 「KANO」野球部名監督・近藤兵太郎の生涯. アトラス出版: 松山, pp. 6-230 .
- 魏徳聖, 陳嘉蔚: 宇野幸一, 阪本佳代訳 (2014) KANO1931海の向こうの甲子園. 翔泳社: 東京, pp. 406-407, 427-428, p452.
- 嘉義市政府 (2014) 台湾本壘・KANO 精神 燃える嘉義野球の土を一つまみ取ろう. 嘉義市政府文化局: 嘉義, pp. 3-45.
- 片倉佳史 (2015) 別冊宝島2355号日本人が残した素晴らしい台湾~統治時代の貴重な写真を発掘!. 宝島社: 東京, p. 41, p. 63.
- 片倉佳史 (2015) 古写真が語る台湾日本統治時代の50年1895-1945. 祥伝社: 東京, pp. 162-165.
- 川西玲子 (2014) 戦前外地の高校野球. 彩流社: 東京, pp. 13-60.
- 喜安幸夫 (1997) 台湾の歴史. 原書房: 東京, pp. 119-121.
- 国立嘉義大学 HP, <http://www.ncyu.edu.tw/NewSite/>
- 西脇良朋 (1996) 台湾中等学校野球史. 自費出版: 加古川, pp. 144-148.
- 小川隆行 (2014) 2014甲子園データバイブル. メディアックス: 東京, pp. 44-16.
- 王御風, 蔡博任 (2014) 図解台湾棒球史. 好読出版有限公司: 台中, pp. 11-55, pp. 32-34, p. 35, pp. 46-106, pp. 154-187. pp. 184-187.
- 坂上康博 (2001) につぼん野球の系譜学. 青弓社: 東京, pp. 15-20.
- 佐山和夫 (1998) ベースボールと日本野球. 中央公論社: 東京, pp. 47-52
- 島田明 (2001) 明治維新と日米野球史. 文芸社: 東京, p. 9.
- ストライク・ゾーン (2015) 台湾プロ野球 (CPBL) 観戦ガイド. 論創社: 東京, p. 71.
- TAIPEInavi HP, <http://www.taipeinavi.com/miru/212/>
- 玉木正之, ロバート・ホワイティング (1991) ベースボールと野球道. 講談社: 東京, pp. 3-8, p. 240.
- 飛田穂洲 (1974) 学生野球とはなにか. 恒文社: 東京, pp. 18-32.
- 湯川允雄 (1932) 台湾野球史. 台湾日日新報社運動具部: 台北, pp. 1-2.

